

おいしい水

こうこうじだい ともだち ま あ つか きつさてん おだきゅうせん
高校時代、友達との待ち合わせによく使った喫茶店があった。小田急線の

しもきたざわ せんろ よこ はい ところ こ
下北沢の線路わきをちょっと横に入った所なのだが、小ぢんまりとした

きづく みず なまえ みせ
木造りの店で、「おいしい水」という名前の店だった。

は だ まど よこ せき すわ ともだち く ま
わたしは張り出し窓の横の席に座って、友達が来るのを待ちながら、わた

ちい じぶん うちゅう も
しもいつかこんな小さな自分だけの“宇宙”が持てたらいいな、といつもぼ

かんが
んやり考えていた。

アントニオ・カルロス・ジョビンのボサノバに『おいしい水』という曲が
あると知ったのは、20歳を過ぎてからだ。

は こうこう い きつさてん みず
恥ずかしながら、それまで高校のときによく行った喫茶店「おいしい水」
みせ なまえ ゆらい まった し
の店の名前がボサノバに由来していることなど全く知らなかった。というよ
りも、ボサノバ自体、一体何なのかもわからなかった。

かんが さいのう さい ひ
どう考えたって才能ありそうもないのに、20歳になったある日、そのこ
ろのめり込んでいたシャンソンを自分でも歌ってみたいと思う一心で、ある
せんせい ところ かよ はじ せんせい こえ き
先生の所へ通い始めた。先生はわたしの声を聞くなり、「アストラッド・
ジルベルトを聴いてごらん」と言った。

ものがたり 物語のタイトルをつけるのが苦手なわたしが、^{にがて}今回ばかりは^{こんかい}小説の^{しょうせつ}

^{なかみ}中身を書き上げるよりも^{さき}先にタイトルが決まっていた。

ジルベルトの^{かんのうてき}かれた^{うたごえ}官能的な^き歌声を聴くと、^{さい}20歳のころ、^い行きつ^{もど}戻りつ、

^{ひび}もんもんとすごしていた日々がわたしの中で、^{なか}妙に^{みょう}重なり^{かさ}合っ^あてよみがえ
ってくる。

^{しょうせつ}小説『^{みず}おいしい水』は、^きタイトルが決まったときから、^{じぶん}自分で^{いしき}意識して

はいなかったことだけれども、^{なみま}波間を^{ただよ}漂うような^{いま}今までの^{ひび}日々とのひとまず

^{けっちやく}の^{めざ}決着、^{おも}を目指していたのではないかと思う。

^{しいなさくらこ}椎名桜子『それでもわたしは白い服がほしい』マガジンハウスより